

「分析アジア哲学 台湾派遣参加報告書」

京都大学文学研究科 教務補佐 佐藤里保

1) プログラム内容

今回の派遣プログラムにおいて、報告者は18-20日に政治大学で開催された現象学・中国哲学国際学会を公聴した。この学会においては中国の哲学と西洋哲学における意識や自己に対する姿勢・考え方の比較についての発表が多く、アジア哲学との対照によって、より多面的な方向から自身の研究の方向性を検討する可能性が得られた。21日には東海大学における学会に参加し、生の意味や道徳に関する発表を紅潮した。また、東海大学の学部生・院生・先生方との交流を行った。22・23日は京都大学・台湾大学合同で開催された「自我・主観・意識」をテーマとした学会(Kyoto-NTU Graduate Student Colloquium)に参加し、報告者自身も「God Perception and Points of View」という題で自身の研究に関する発表を行った。

2) 学習成果

報告者は現在近世西洋哲学における主観性の哲学について研究を行っている。本プログラムでは、アジア哲学における主観性に関する研究発表や、東洋と西洋の主観性・意識の哲学を比較するような研究発表が多く、報告者の研究内容に深く関係しているので、本プログラムに派遣することを検討した。また、前回の派遣にて報告者自身と類似する研究を行う院生・教授が多く、彼らとの交流も目的としていた。

報告者は上述のカンファレンスにおいて、西洋哲学における主観性と神の関係について発表を行った。台湾大学には中国哲学に精通している学生・先生方が多く、中国哲学における主観性の二重性との類似性を指摘されるなど、比較哲学への示唆も多く得られ、報告者の研究に多面的な視点を与えた。

また、各学会で公聴した発表においては、自身の研究する哲学と非常に類似した中国哲学を示す発表もあり、自身の研究を進めるうえで新たな知見を得られた。

3) 海外での経験

アジア哲学をメインとした学会であったため、上述の学会には、日本の哲学・思想を分析しようとする発表もあった。西洋哲学的な視点をもって分析・歴史的研究が行われていることを間近で感じ、これまで当然であると考えていた思考の傾向や方法に対して再発見をさせられた。また、懇親会等において、台湾大学の学生と交流するうちに、大学のシステムや研究方法にも大きく違いが見られ、新たに気づきを得た。

4) 進路への影響

本プログラムにおいて、研究発表を通じて、自身の研究に多面的なアプローチを得られる良い機会となった。また、今回の派遣を通じて、改めて研究を続ける意思と博士課程への進学を検討するようになった。